H20.5.26(月)

日本経済新聞

select nippon

景気ウオッチ

川越、観光「全国区」へ好機

蔵造りの町並みなど江戸情緒あふれる埼玉県屈指の観光地「小江戸・川越」が沸いている。二〇〇九年春から始まるNHKの朝の連続ドラマ「つばさ」の舞台に決まったのだ。外国人観光客も増えている。川越は今、首都圏の客を中心とする日帰り観光地から、もう一段発展できるかどうかの大きな転機に立っている。

「埼玉と川越をアピールするよい機会」（上田清司知事）。「つばさ」は川越の老舗和菓子店で働くヒロインが成長していく物語。連ドラ八十作目だが、埼玉県は都道府県で唯一、その舞台になったことがなかった。それだけに地元には歓迎ムードが広がる。

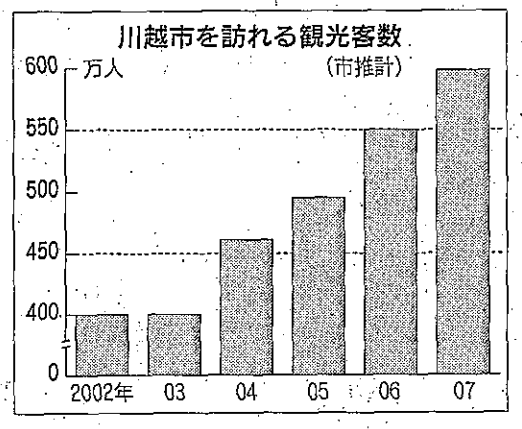
この好機を生かさない手はない。「NHKと連携して効果的なPRをしたい」と川越市観光課は早速準備を始めた。狙うのは全国からの誘客だ。市によると、観光客の出発地は九割近くが関東地方。「毎朝、川越が全国に放映される宣伝効果は大きい」と市観光課は期待する。

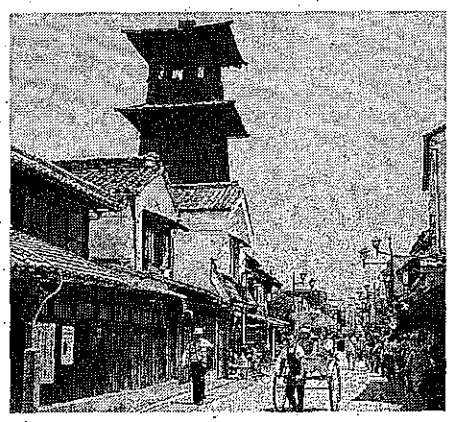
地元バス会社、イーグルバス（川越市）の谷島賢社長も「羽田空港と川越を結ぶ高速バスの増便を考えたい」と全国から観光客を川越に呼び込む考えだ。

川越市を訪れる観光客は、ここ数年順調に増えている。政府の観光立国推進に歩調を合わせて市はイベントを連打。〇七年は天皇・皇后両陛下が来訪された効果もあり、〇四年比一・三倍の約六百万人が訪れた。

「ビジット・ジャパン・キャンペーン」の効果で外国人観光客も増えている。〇七年は三万一千人が訪れたもよう。同年六月、国土交通省の「観光ルネサンス補助制度」の対象地域に選ばれ、補助を活用して標識や案内板の多言語表記を増やした。

旅行業界も熱い視線を送る。JTBは三月末から外国人を対象にした川越ツアーを始めた。「今年度は二百人くらい集めたい」と同社。イーグルバスは外国人富裕層向けツアーの開発を急ぐ。谷島社長は「料亭など本当の川越を味わう体験型ツアーを計画している」と話す。




川越の代表的な観光名所である蔵造りの町並みと時の鐘

受け入れ態勢の拡充課題

ドラマへの期待が膨らむ地元だが、その経済効果を一過性に終わらせないためには、好機の今こそ将来を見据えた取り組みが重要だ。川越の観光地化の仕掛けづくりに多く携わってきたPR会社相談役の谷沢勇氏は「放っておいても人が来るようになったが、いずれ飽きられる。しっかりした受け入れ態勢を整えるべきだ」と警鐘を鳴らす。

「車が邪魔だわ」。栃木県から観光に訪れた中年の女性はちょっぴり残念顔だ。川越が抱える一番の課題がインフラ。蔵造りの町並みの中心、一番街の道路は大型車がひっきりなしに行き交う。

江戸時代の都市計画が残るため道路は入り組んでいる。市は中心市街地の交通規制を検討しているが、小江戸川越観光協会の岩堀弘明会長は「まずは一番街を一方通行にしたうえで、土日に時間を区切って歩行者天国にしてほしい」と要望する。新たな観光スポットやルートの開拓、休憩所の設置なども含め、官民一体の受け入れ態勢の整備が急がれる。

ソフト面では、今年二月、初の「ご当地検定」を実施した。市民の川越に対する知識を増やし、観光客をもてなす「市民総コンシェルジュ化」（観光協会の岩堀会長）を目指すという。

観光県と目されることが少なかった埼玉県だが、さいたま市に昨年十月オープンした鉄道博物館が半年で百万人以上の来場者を集めるなど明るい話題も増えてきた。県内観光地の代表である川越のもう一段の飛躍は観光立県に向けて重要な意味を持つ。

（さいたま支局　井上孝之）